

技術シンポについて

○藤井泰範 国立天文台 技術推進室

概要(Abstract)

国立天文台 技術推進室の研究会担当となり天文学に関する技術シンポジウム（以下 技術シンポ）にかかわってきました。これまで及びこれからの技術シンポについて雰囲気をお伝えできればと思います。

1. 技術シンポ キライ

全くの個人的見解ですが、発表を行ったり聴講したりするときに、何を提供もしくは獲得できるか？という視点で参加してきました。これまで電波望遠鏡受信機開発に携わってきたため、天文学会やミリ波サブミリ波受信機WS等で発表を行えば互いに知った関係者であるために、業界用語での密な意見交換や情報収集が可能でした。

技術シンポは当時印刷された報告書が配布されたために、報告内容はざっと見ていたのですが、なかなか自分の興味にマッチした報告が少なく、あえて参加する気も起きませんでした。

2. 連携・交流

業務における他のチームとの連携や交流の重要性は認識しています。プロジェクト内であれば運用が無ければ望遠鏡は観測できませんし、そもそも観測するサイエンスモチベーションが無ければ開発の方向性も決まりません。また、プロジェクト間連携として最新技術をいかに導入・問題解決するかとか、観測装置を運用する面での共通の事例等相手を知っているからこそできる連携もあると思います。

3. 世話人会

技術シンポにかかわらず、何らかの会合を開催するときに世話人の活動はそれなりの労力がかかります。募集要項を整備したり、会場を押さえたり、プログラムを作成したり、世話人企画を検討したり、ここ 2 年は世話人として国立天文台 各観測所からの協力を得ています。遠隔地会議であるが故のハンデもありますが、国立天文台内の連携を深める一助になればと思っています。

4. 経費・運営

国立天文台内の事情ですが、2014 年度まではボトムアップ組織である国立天文台 技術系職員会議が企画・予算申請・運営を行ってきました。2015 年度からは「新体制技術推進室」に経費が移管され予算申請を行っています。歴史のある技術シンポですので大きく変革を行うのに抵抗があるかもしれませんが、ここ数年の雰囲気の変化は会を運営するにあたり説明責任をどう果たしていくかにあるかと思います。

5. 技術推進室の考え

2018 年秋に高見技術主幹から国立天文台技術系職員に対して「技術シンポについての考え」が示されました。概略としては「技術シンポは長年にわたり技術系職員を中心に企画運営され天文学関係の技術者の交流の場として重要な役目を果たしている。一方国立天文台のリソースを使用しているという観点から国立天文台の目指す方向に沿っていることが期待される。」です。国立天文台が現在目指す技術的方向とは大型観測施設の建設・運用が主になるのですが、これは必ずしもそのミッションのみの研究会を行うという事ではなく、大型観測施設に必要な技術力をいかに獲得・維持するために天文関係の技術者と密な連携を取りつつ将来について議論する場として技術シンポが期待されていると解釈しています。

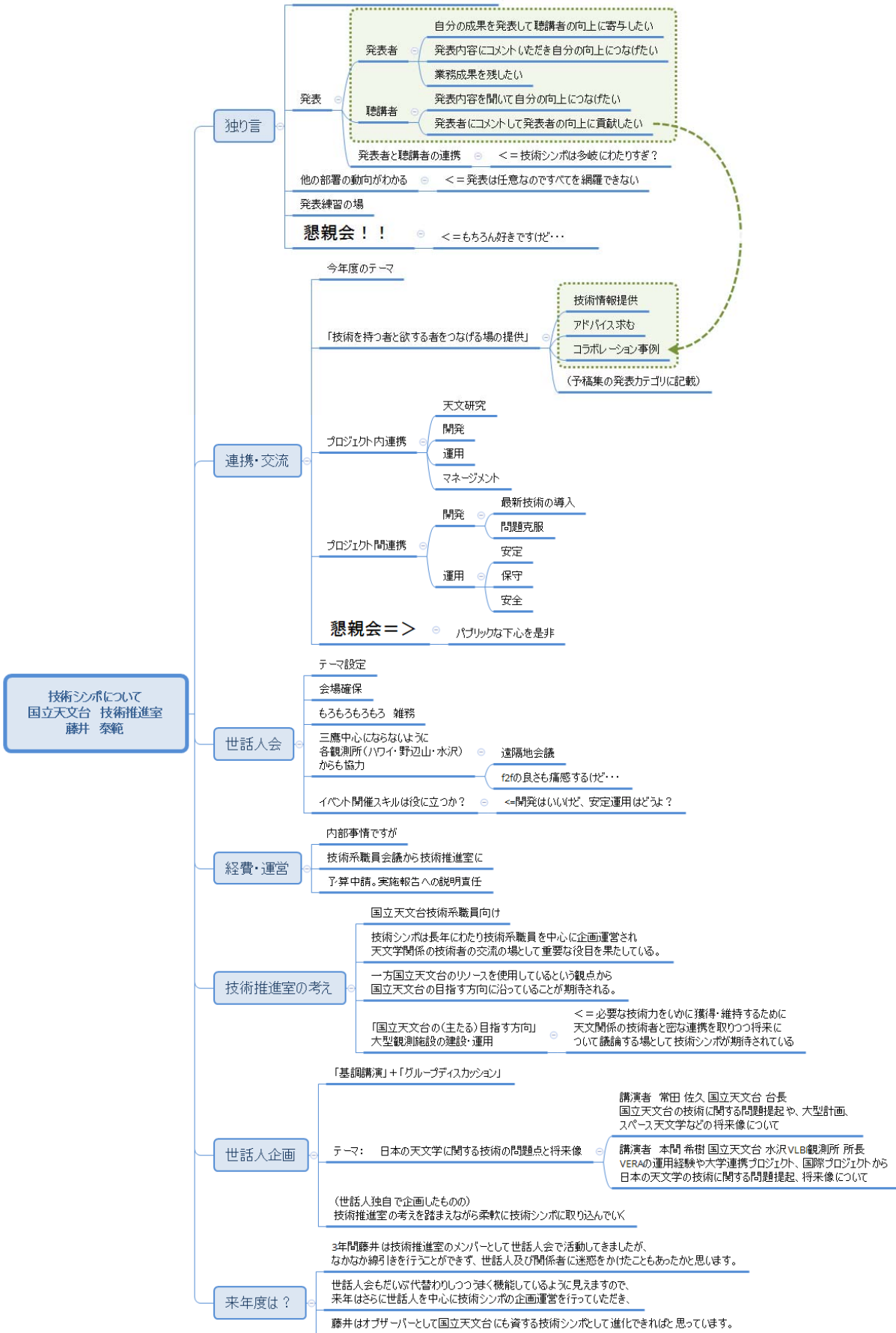
6. 世話人企画

前回に引き続き今回の技術シンポも世話人企画として「グループディスカッション」を開催します。世話人企画自体は先の技術推進室の考えとは独立に検討されていますが、うまく融合することにより、より柔軟的に技術シンポの意義を関係者で共有できればと思っています。

7. 来年度は

この3年間藤井は技術推進室のメンバーとして世話人会で活動してきましたが、なかなか線引きを行うことができず、世話人及び関係者に迷惑をかけたこともあったかと思えます。世話会もだいぶ代替わりしつつうまく機能しているように見えますので、来年はさらに現場を中心とした世話人を中心に技術シンポの企画運営を行っていただき、藤井はオブザーバーとして国立天文台にも資する技術シンポとして進化できればと思っています。

技術シンポキライ



口頭発表に使用したマインドマップ。XMindというソフトで作成およびプレゼンを行いました。